

【巻頭言】

年頭のご挨拶

会長 神 澤 良 明(43 回生)

明けましておめでとうございます。皆さまのご健勝とご多幸をお祈りいたします。本年もどうぞ学友会をよろしく願いいたします。

平成 26 年を振り返ってみると、1 月の STAP 細胞の作成発表会見からの騒動で理研の体質が表面化し、自殺者まで出てしまった。この問題はまだ終わっていないが、是非 STAP 細胞が再現できることを望んでいる。再現できることが科学なのだと思う。

8 月 16 日～ 17 日にかけての局地的な豪雨で、京都府福知山市や兵庫県丹波市などで水害による甚大な被害が出た。また同時期の 8 月 20 日には広島市において土砂災害が発生。これも局地的な豪雨が長時間続いたことによる災害で、74 名の方が亡くなられた。被災地に住む会員がいるとの情報で、会員の安否確認を広島支部に依頼し、全員の無事が確認でき安堵した。

9 月 27 日には木曾御嶽山が噴火し、多くの登山者が犠牲となった。大きな噴石の直撃が致命傷となったようだ。このように自然災害が枚挙にいとまがない 1 年であったが、悲しいニュースばかりでは無かった。青色発光ダイオード(LED)の研究により、ノーベル物理学賞に日本の研究者 3 名が同時に選ばれた。LED 照明で白い光源が得られたのは青色 LED の発明に他ならない。この発明により照明用の消費電力が 1/2 ～1/3 になり、併せて CO2 の排出量も同程度削減できるという。地球を守る上で青色 LED の開発は大きな意味がある。

このニュースは暗いニュースが続く中、日本人を元気にしたと言えるだろう。この研究者はこれからも一貫してこの研究を続けられるようである。大きな目標を持って継続する力を見せつけられた。

私は平成 23 年 5 月 21 日の総会で会長に選出され今年の総会で丸 4 年を迎える。会長就任には一つの目標を持って臨んだ。それは短大卒業生の学友会参加対策である。短大卒業生の参加が少ないと言われていた。短大卒業生が学友会から離れていったら、学友会はどうなるのか、と言った心配の声が周囲から聞こえていた。短大卒業生に学友会活動を知ってもらう必要があった。まず、多くの短大卒業生の方に理事に就任していただいた。少しでも学友会のことを知ってもらう必要があったからで、当面は参加していただくことで雰囲気を感じてもらうだけで十分であると思っていた。勿論、委員会にも参加してもらい学友会活動を感じてもらった。支部総会に出席した時にも支部活動での短大卒業生の参加、役員への登用を訴えた。

平成 24 年 9 月には、創立 85 周年記念祝賀会を京都ホテルオークラで開催した。京都医療技術短期大学は平成元年に開学し平成 23 年 10 月 17 日付で閉校となっていた。短期大学の 23 年の歴史を振り返ると共に、この祝賀会を短大生全体の同窓会という位置付けで行いたいという発案で、各学年から実行委員を選出し、参加を募った。その結果、約 170 名の短大卒業生が参加してくれ全参加者の約 6 割を占めた。少しの動機付けでこんなにも多くの短大卒業生が集まったのだと感動を覚えた。85 周年を記念し、総会でお許しを得て学友会のバッジを創らせていただいた。少し遅れはしたものの平成 26 年 7 月に会員の皆様に配布した。バッジは色合いもよく、学会等でバッジを付けた会員に会えるのを楽しみにしている。

平成 26 年 7 月に開催した「西谷源展先生ご退任記念講演会・祝賀会」にも 275 名中約 120 名の短大卒業生が参加した。

平成 27 年 5 月 30 日には総会を京都で開催するが、その実行委員長、副実行委員長を短大卒業生が担ってくれる。もう学友会の中心は短大卒業生だと感じている。

この学友会を継続していくうえでの世代交代は、当初の目的の通り達成できたものと思われる。皆様の力で学友会を盛り上げていただけるものと期待している。

最後に皆さま方の益々のご活躍とご健康をお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。

以上

